

# 中世東大寺の料田経営に関する一考察

——大仏殿長日仏聖料田の事例を中心に——

西尾 知己

## はじめに

古代より、寺院においては法会運営の財源として「料田」が設定されたことは周知のことである。東大寺でも事情は同様であり、国衙官物の支給、または私領主よりの加地子寄進により、各法会の料田が設定された。しかし、鎌倉期に入ると、一段から数段単位という零細な田・畠・家地よりの中間得分権（作手・作主職・地主職などと表現される）が寄進・買得により料田として集積されるようになる。このような形式は戦国期に至るまで見られるから、鎌倉期における新たな料田集積のあり方は東大寺の収取体制史上きわめて大きな意味を持つものと評価できよう。（以下では、鎌倉期以降に一般的になる零細集積型料田を単に「料田」、平安期以前に一般的に見られる、比較的広域で、国衙官物を支給される形で成立した料田を特に「免田型料田」として区別したい。）

本稿は、特に鎌倉期の零細料田に焦点を当て、その料田を東大寺

がいかにか維持していたのかを考察するのが目的である。

東大寺の料田について、これまでの研究史では、史料的に充実している大仏殿燈油料田を中心として、世親講料田・二月堂料田などの事例からさまざまな論点が提示されている。<sup>(1)</sup>ここでは本論に入る前に、まず、これら先学の指摘を、料田の経営を検討するという本稿の目的に沿って整理し、より具体的な論点を提示したい。

料田の経営構造については、大きく分けると二つの側面から述べられてきた。

一つは、燈油聖による土地集積・経営という側面である。この見方は、大仏殿燈油料田の事例から主に指摘されており、燈油聖による積極的な勧進活動を基盤として集積された料田が、地主（大仏殿Ⅱ燈油聖）―作人関係を基礎として経営されていた、という見方である。この点は、泉谷康夫・熱田公氏以来、諸氏に共通の見解と言つてよい。

一方、いま一つの側面として、地主―作人関係の存在を前提としつつも、年預所―公人という東大寺権力組織を料田における実質上

の収取組織としてとらえる見方も出されている。伊賀国黒田荘における収取体制を、政所―預所―三職の系統による「名田体制」から、年預所―公人の系統による「料田体制」への転換と捉える新井孝重氏、世親講料田における料田得分の収取を「年預所を通じて、少綱・公人を派遣し収納を行わせた。」と評価する永村真氏はこのような側面を特に強調した説と言えよう。

確かに、後者の見解は、近年の寺内構造研究の成果を積極的に反映させ、料田の経営構造に新たな視点を提示した点で評価できる。

しかし、一方で前者の見解で提示されてきた勸進聖による土地の「集積・経営」が東大寺権力による「収取」といかなる関係にあるのかという点については、なお、検討の余地があると思われる。

以上のような問題意識の下、地主―作人関係と東大寺権力組織である年預所―公人や政所―預所の系列が、料田経営の上でいかなる関係にあったのか、について考察を加えることが本稿の目的の第一点めである。

さらに、もう一つの疑問点としては、料田からの収入は東大寺経済全体の中でのいかなる位置づけを与えられたのか、という点が挙げられる。この点については、特に新井氏により、「名田体制」から「料田体制」への転化、という指摘がなされている。この見解は東大寺における土地支配の変質過程を平安期以来の荘園・免田から中世の料田への「転換」として捉えようとする見方である。しかし、実際には、鎌倉期を通じて、国衙官物の系譜をひく免田型料田と零細

型料田とが供料確保の上で併存している。本稿では、その点を確認し、それぞれの調達方法にいかなる意味があったのか、という点にも注目してみたい。この点を本稿におけるもう一つの目的としたい。なお、本稿では、特に大仏殿長日仏聖料田を事例として取り上げ、これらの問題に解答を出して行きたい。

## 1、料田の経営構造

本章では大仏殿長日仏聖料田である伊賀国黒田荘後田一段小の田地における進退権をめぐる、東大寺僧理詮と大仏殿堂童子との相論事例を主に取り上げたい。そして、その相論に関わる人々の立場を見据えることから、料田の経営構造について考えてみたい。

### (一)、理詮・堂童子相論の概要

寛元元年（一二四三）七月頃、大仏殿堂童子は次のような申状を、（おそらくは東大寺別当政所に対して）提出している。この史料は、相論の過程を知る上で極めて有用であるので、以下に関連部分を引用する。

#### 【史料1】<sup>(2)</sup>

大仏殿堂童子申<sup>等</sup>

欲被晴春令寄進御仏聖、黒田御庄之内、字後田一段小、且任累代券文、且任先度沙汰、永止理詮<sup>真教房</sup>濫妨子細事、

件子細者、彼田者、真教房領也、而相副本券、<sup>(a)</sup> 沽却<sup>之</sup>阿畢、而彼人令寄大仏長日御仏聖畢、<sup>(b)</sup> 而今<sup>年</sup>四月之比、<sup>(c)</sup> 彼内小者、<sup>(d)</sup> 稱<sup>不</sup>沽却、致濫妨之間、已晴春知行之時者、理詮私為作主職、究濟一段小所当米、為仏物之後、抑留之条、不叶物儀之間、申賜子細於惣寺、堺四至、又打一段小之<sup>クヒ</sup>畢、而猶致抑妨之条、<sup>(e)</sup> 不非不当哉、他寺僧者仰大仏寄之、当寺人者、蔑大仏妨之、積惡之至、敢無比類乎、惣任本券・寄文等、且任<sup>(f)</sup>度次第旨、不可被令停止彼濫妨之由、可被仰下候、(中略) 早可被<sup>(g)</sup>止両人之濫惡之由、<sup>(h)</sup>欲被下嚴密之仰、此事執行所・年預所度々雖有御下文、更以不敘用、進退惟谷之間、如此申上候也、若無御沙汰候者、彼等狼藉倍增、大仏御領<sup>(i)</sup>失墜候歟、尤被誠是非、可被慎後惡候、仍乍恐言上如上件、

【史料1】は年月日欠であるが、寛元元年七月二十五日付けの範宴奉書<sup>(3)</sup>において、「堂童子等申状、昨日被仰候き、」とあるので、おそらく寛元元年七月二十五日以前に提出されたものと見てよからう。当史料からは、大仏殿長日仏聖料田である後田一段半の伝領関係、相論の過程を知ることができる。伝領関係としては、傍線部<sup>(a)</sup>に見られるように、寿永二年(一一八三)に相博により当地の権利を取得した東大寺僧理詮(真教房)の所領であった<sup>(4)</sup>。しかし、その後貞永元年(一二三二)に、理詮は比丘尼教阿弥陀仏に売却し<sup>(b)</sup>、さらに、寛元元年四月十八日には、教阿弥陀仏の親族と思われる晴春(阿念)が大仏殿長日仏聖料として寄進している<sup>(c)</sup>。寄進状に

よると、当田地からの仏聖料は大仏殿堂童子に一日六合ずつ年間で二石一斗六升が下行されることになっていた。

しかし、傍線部<sup>(d)</sup>に見られるように、実態としては売却後も理詮が作主職と称して供料を抑留していたようである。そのため、堂童子は惣寺に訴えを起こし、また執行所・年預所も理詮への押妨を停止する命令を出したが、理詮はなおこれに従わなかったようである。そこで、堂童子等が重ねて訴えを起こしたのが当文書である。その後堂童子等の訴えは聞き入れられられしく、閏七月二日には、政所御教書・下文をうけて、年預所・預所<sup>(7)</sup>が「一向六人堂童子為進退料田、所当可納下」との下知を黒田莊三職に下知し、三職は同日付けで請文を提出している<sup>(9)</sup>。その結果、十月には堂童子が所当の供料を受け取っている<sup>(10)</sup>。

以上が、当相論の概要ということになる。

さて、この相論は、既に新井氏により紹介されており、氏の主張する黒田莊における「料田体制」のあり方を示す上で重要な位置づけが与えられている。しかし、筆者はその理解において、氏と相違する点がある。よって、ここではまず氏の説を再検討した上で、改めて料田経営構造について考え直してみることしたい。

#### (ii)、新井説の再検討

新井氏は伊賀国黒田莊における收取体制が名田体制(学生供米徴収体制)から料田体制へと転換するという自説を展開するなかで、

料田体制の支配構造を示す事例として、この相論を紹介している。<sup>(11)</sup>  
その支配構造を示す根拠として挙げられたのが次の史料である。

【史料2】<sup>(12)</sup>

〔使公人友房 友行 真清 為行〕<sup>(異筆)</sup>

下 黒田庄

可早致沙汰晴春寄進大仏殿御仏供料田事、

右、件御仏聖田者、理詮致小之所濫妨、以外僻事也、任 政所御教書、一向六人堂童子為進退料田、所当可納下、若此上三職致矯飭者、可被行罪料者也、并河井料田致作人妨之条、甚以不可然、如堂童子申付、可為新作人之状如件、

寛元元年後七月二日

預所（花押）（裏）「執行藏人法橋範慶」

【史料2】で、後田一段小に関する命令は傍線部分にあたる。なお、後半部分の「河井」の地は、別の供料として同じく阿念により寄進された田地である。【史料2】について、新井氏は堂童子（＝公人）<sup>(13)</sup>に充てたものと解し、そこから堂童子に対して認められた進退権を年預所—公人という料田体制下における支配体系に基づくものと位置づけ、これまでの名田体制下における政所—預所—三職の収取体制にとって変わるものと評価されている。氏の見解によれば、学生供米を収取する体制である、預所—三職という組織が後田一段小

において学生供米の収取を行うことができなくなり、その代わりに年預所—公人の組織が同地から仏聖米の収取を行うようになったことになる。

しかし、先述の相論過程でも述べたように、この文書は傍線部分を見る限りでは黒田庄三職宛てであると思われる。これは、同日付の三職の請文において、「政所・執行所・預所御下知之状に任せ」て堂童子の進退を認める旨を誓約している点からも明らかである。また、ここで堂童子が進退を認められているのは、大仏殿長日仏聖供料として寄進された際に後田からの収入が堂童子の得分とされたからであって、堂童子が公人であったからではない。それは、【史料2】における「使公人」として派遣されているメンバーが、相論の後、後田からの所当や、同地の権利文書の請取状（後掲【史料3】参照）に署判している六人の大仏殿堂童子（為房・守房・行房・友房・友行・安房）と一致しないことから明らかである。

すでに述べたように、この事例では、長日仏聖料田はあくまで大仏殿への「寄進」という、東大寺権力機構が直接関係しないという意味で「私的」な関係により成立したにすぎず、年預所・政所が「公人としての堂童子」を派遣したのは、あくまで理詮の押領という事実を「大仏殿の堂童子」が訴訟の当事者として訴えたからにすぎない。

つまり、料田からの得分の収取は、あくまで年預所・政所のような機関とは関係なく、本来後田よりの供料を下行されることになっ

ていた大仏殿堂童子により行われたと考えるべきであろう。

この事例が複雑である点は、大仏殿のもとで料田進退に関わる大仏殿堂童子が、料田の押領という状況下で東大寺の政所・惣寺の使者としても活動するという、堂童子の二面性にあると思われる。そして、その二面性は、そのまま料田支配の二元性にもつながると思われるのである。そこで、次に改めて当相論から二元的な長日仏聖料田支配のあり方について整理を加えてみたい。

### (iii)、大仏殿長日仏聖料田の経営構造

まず、大仏殿―大仏殿堂童子の関係についてより詳細に検討したい。そこで、挙げたいのは、堂童子が相論後に年貢を請け取ったことを示す次の史料である。

#### 【史料3】<sup>(14)</sup>

請取大仏殿日別御仏供米伊賀国<sup>南渡利</sup>字後田所当事、

合壹斛参斗伍升<sup>但地子升定  
又壹石二升負米充</sup>

右、所請取如件、

寛元元年十月 日 堂童子等

為房（花押）

守房（花押）

行房（花押）

友房（花押）

（裏書）

「寄進状に雖委細有別紙書、此請取之裏に令支配畢、只同事者止状、

（阿念）  
（花押）

任此請取<sup>取</sup>状、毎日御仏<sup>供</sup>○米陸合充令算計者、満足畢、少月分 延余故也、三升歟、

閏月者、三ヶ年一度、無年分、

定燈御方可備進<sup>壹斗八升歟、  
已上貳斗壹升  
可付納所也、</sup>

（阿念）  
（花押）

【史料3】で注目したいのは、裏書部分の記載である。この部分は難解であり、一部意味の取りづらいたところもあるが、堂童子が受け取った所当米の分配方法について記されたものであると思われる。「此請取状に任せ」以下では、①毎日御仏供米（堂童子得分）は一日六合ずつの下行で計算すると事足りる。②閏月は三年に一度であり、閏月のない年には、閏月分の一斗八升を「延余」の三升とともに定燈方の納所（燈油納所であると思われる）に納入する、という旨が記載されていると思われる。以上から、次の点を確認できる。

①燈油納所は燈油聖に寄進された料田の上級地主として、閏月のない年には二斗一升の得分を獲得している。これまで、燈油納所が大仏燈油料田の経営に関わる点は指摘されていたが、長日仏聖料

の経営にも関わっていた事実が確認できる。

②大仏殿堂童子が元来供料を得る立場でありながら、実際には料田の進退を請け負い、実質的には下級地主（作主職）として毎日六合ずつの供料を自らで確保している。つまり、大仏殿—大仏殿堂童子という関係は、実際には燈油納所（上級地主）—大仏殿堂童子（下級地主・作主職）という関係であったことになる。そして両者の関係こそが「収取」関係と呼ぶべきものであることが確認できるのである。

このような大仏殿と大仏殿堂童子との関係はこの事例のみの特殊な関係ではなく、他に大仏殿燈油料田や修正壇供料田でも確認できる。<sup>(15)</sup>これらの事例の共通の特徴は、①いずれも鎌倉期の事例である、②大仏殿供料（長日仏聖料・修正壇供料・燈油料）として寄進された上で、大仏殿堂童子がその進退を請け負うという形をとっている、③寄進の際に「六人堂童子為進退料田」「堂童子六人之内申付畢」のような文言を含んでおり、料田の進退が堂童子個人ではなく堂童子全体の下に置かれている、ことが挙げられる。この事實は、世親講衆に見られるような、寺内階層ごとの自力救済的な経営盤確保の動きとして注目できるが、ここでは、料田からの収取があくまで地主—作人関係に基づいて行われていた点を確認しておきたい。

では、東大寺権力としての惣寺・政所の関わり方はどうであっただろうか。

まず、惣寺は【史料1】に見えるように、理詮の押領に際して、堂童子よりの申請に基づき、料田の四至を定めている。ここで注目の抑留、②堂童子による惣寺への抑留解消の申請、が存在することである。これと同様の状況は、次に挙げる世親講料田についての年預所下知状からも確認できる。

【史料4】<sup>(16)</sup>

（端裏書）

「黒田莊世親講寄田事」

少綱 良慶 公人 友房

下 黒田庄々官百姓等所

可早任下知旨、致沙汰世親講衆領中村鉢貫恒内間事

右、件領者、講衆之所領也、仍為令致作物之沙汰、可差下少綱・

公人等之由、依講衆評議、所令下知也、早存其旨、可苅納作物者

也、抑彼領者、為講衆御進退之条事旧了、而清遠入道并子息新源

太已下村人等、任自由度々苅取作物之条、不当之至未知未聞悪行

無極、早兩年作物悉可譴責者也、此上尚致濫妨者、可行罪過之由、依

衆儀下知如件、

嘉禎四年八月四日

年預五師（花押）

猿轅

世親講料田について分析を加えた永村氏は、この史料から、同料

田では「年預所を通じて、少綱・公人を派遣し収納を行わせた。」とし、それを「講衆御進退」の実態であると評価された。しかし、①清遠入道以下の作物刈り取り行為が前提となつて、「両年作物」が確保できないという状況が生まれていること、②年預所による少綱・公人派遣の前提として、「講衆評議」による依頼がなされていること、③派遣に際しての任務が「収納」ではなく、あくまで「譴責」とされていること、に注目すると、【史料4】の状況が、【史料1】のそれと同様であることは明らかであろう。つまり、惣寺による権力発動は、得分権者・作人の要請を前提として、所当の未進（抑留）譴責を行っているだけで、恒常的な収取は行っていないのである。であるならば、この史料をもつて、料田における年預所を頂点とした「収取」体制の存在を想定する永村氏の見解は妥当ではない。<sup>(17)</sup>

一方の別当・執行所・預所が属する、いわゆる政所系列の組織も、必ずしも料田支配に無関係とは言えない。このことは、政所（別当）の御教書を請けて、執行所・預所が黒田荘三職に堂童子進退を命令していることから明らかであろう。寛元年間には、このほかにも、黒田荘の預所が寺僧私領・料田の進退権認定・公事免除に関して下文を發給しており、<sup>(18)</sup>執行所を中心とした莊園支配機構が領内の私領・料田の進退権保持に大きな役割を果たしていたことが分かる。

以上、さまざまな立場に立つ人々の料田経営への関わり方について個別的に論じたが、結論づけると次のようになる。

まず、料田の収取については、基本的には東大寺権力が収取にタツ

チしないという意味で「自律的」なものであり、私領支配に見られる地主―作人関係を機軸にした「収取」体制をとっていた。しかし、ひとたび料田に押領などの権利侵害が起これると、「料田維持機能」として、東大寺権力、すなわち惣寺・政所（執行所）が関係する。しかし、両者はその関係する背景が異なる。年預所は法会維持という目的の下、料田からの供料未進分の確保を行うという性格が強いが、政所系列の組織はむしろ莊園内における寺僧私領・料田の進退権の確保という意図から料田の安定を保証するという性格が強いのである。

このように、料田の経営は、各講衆・堂舎・その他寺内集団による自律的な中間得分権収取を東大寺権力がバックアップすることにより成り立っていたのである。

## 2、長日仏聖供料全体の中の料田の位置づけ

次に仏聖料全体の中で、零細料田がいかに位置づけを与えられていたのか、という点について考えてみたい。

大仏殿長日仏聖料は、「毎日御仏供料」などとも言われるように、大仏殿で毎日行われる定例仏事に際しての供物の料足であつたらしい。この用途調達の全体像は、元応二年（一三二〇）の仏聖料に関する記録からある程度知ることができる。<sup>(19)</sup>それによると供料負担は、次のような分担であつた。

一月	長屋莊・長田莊、
二月	長田莊・小東莊、
三月	小東莊、
四月一日まで	小東莊、
同月一二日から五月「無足」、	
六月・七月	政所、
八月	大宅莊
九月	大宅莊・櫟莊
十月	目安莊
十一月	目安莊・服莊
十二月	服莊
閏月	尊勝院寄進分（十日分）

莊園名で記されているものは、いずれも大和国内に存在し、平安期に白米免田として供料の収取を認められた諸莊である。<sup>(20)</sup>このような負担の分担は、建保二年（一二二四）五月の「東大寺領諸莊田数所当等注進状」<sup>(21)</sup>でもほぼ同様の状況が確認できる。また、「政所」とあるのは、封戸・莊園の収入から政所（執行所）が大仏殿堂司（仏聖料の下行を司る寺職）に供料を下行することを示しており、一二世紀初頭より美作国封戸・笠置莊から六月分の供料を下行をした事例<sup>(22)</sup>などが確認できる。また閏月は元応段階では、十日分を尊勝院が

寄進しているが、一二世紀段階では「抑閏月仏聖者、自往古以来、代代寺家政所沙汰也」とあるように政所の負担であった。<sup>(23)</sup>このように、若干の変容はあるものの、すでに一二世紀段階には、長日仏聖料は元応の記録とそれほど異ならない形で供料下行が行われたようである。さらに、仏聖料の下行は「御仏供、從八月一日、以今年料被備進、其例也」<sup>(24)</sup>とされていた。よって長日仏聖料の下行は、年度初めの八月より白米免田からの収入を宛て、年度末の六月以降は、それでカバーできない料足を政所が補うことになっていたことが分かる。すなわち、一二世紀時点では、供料は白米免田・政所へ依存する経営形態であり、料田が介在する余地はなかったのである。

しかし、鎌倉末期の元応年間には、四月・五月が「無足」とされているように、用途調達は不足がちであった。また、政所負担の閏月分下行は、すでに応保二年（一一六二）に大仏殿堂司が目代威儀師の下行懈怠を訴えているように、一二世紀中期には円滑に行われない状況が見られたようである。

ここからは、年度末における供料不足という実情が伺われる。そして、料田の成立がその供料不足と関係することは、次の東大寺僧聖玄の寄進状から伺われる。東大寺僧聖玄は伊賀国黒田新莊の預所にも任じられた人物である。彼は宝治三年（一二四九）三月に八幡宮、二月堂などに田地を寄進しているが、<sup>(25)</sup>「大仏六月御仏聖闕如料田」としても、黒田新莊内の私領田地五段を寄進している。この寄進状では寄進に至るまでの経緯が述べられている点が大変興味深い。



その中には次のようなことも述べられている。

抑大仏寄進五段之領者、法眼聖玄私領也、而兼乘播磨法橋、当寺  
為執行之時、夢見様者、着黒染衣袈裟僧、入来天申様者、大仏  
御仏聖六月之分令闕如之条、何様事哉之由令申、執行答云、御  
仏聖者、大和国三十六町負田也、而号興福寺寺僧領、不令備進  
之条、力不及之由、令申答

注目したいのは、聖玄が仏聖料田を寄進する背景として、興福寺  
僧による大和国内三十六町を占める白米免田の押領により、六月分  
の供料が闕如していた、と語られている点である。このフリーズは  
「夢見様」とあるから、もちろんそのまま実態を示すかどうかは、検  
討を要するが、この他にも、六月の仏聖料として寄進された事例は  
見られ、供料の闕如と料田形成が密接に関係していたことは確かだ  
ろう。<sup>(26)</sup>

以上から、長日仏聖料田は、元来白米免田・政所よりの下行に依  
存していたが、一二世紀後期には年度末の下行が滞るようになり、  
その欠を補うため、勸進聖による料田確保が行われる、という料田  
成立構造が一端が分かるのである。

さて、以上の過程を見た上で改めて新井氏の指摘を吟味してみた  
い。氏は、鎌倉期における料田の成立を、東大寺における名田（＝  
莊園年貢）から料田への土地支配原則の転換という流れで捉えた。

しかし、氏が考察の対象とした鎌倉期に限定すると、その末期にい  
たるまで、料田は莊園年貢からの収入と並立するものであった。す  
なわち、鎌倉期の仏聖供料は、政所への依存・免田、莊園よりの収  
取・地主得分権に基づく収取、という三本の柱で維持されていたの  
である。

### むすびにかえて

本稿で指摘した点を整理すると以下のようになる。

① 仏聖料田における経営構造は、地主―作人関係を軸とした「収取」  
機能と年預所―公人（供料確保）、政所―預所―三職（下地進退権  
の確保）という「料田維持」機能という二つの機能で維持されて  
いた。

② 仏聖料田における零細料田は、年度末の供料闕如を補うことを目  
的として設定された。しかし、鎌倉末期まであくまで料田は補助  
的な役割にとどまっており、政所よりの下行・免田型料田よりの  
収取・零細料田よりの収取は、並立する経営基盤であった。

さて、最後に今後の課題について二、三触れておきたい。本稿で  
は、個別料田を扱ったため、今回の指摘が一般化しうるのかどうか  
という点はいまだ問題が残されている。<sup>(27)</sup> 先行研究でも各料田を横断  
した総合的な検討は全くと言ってよいほど行われていない。おそら  
く、これは膨大な料田寄進・買得に関する寄進状・売券類の整理が

困難であるためであろうが、この点を乗り越えることにより、より豊かな料田像、さらには土地所有のあり方そのものの像が浮かび上がってくるであろう。また、今回は平安期から鎌倉中期にかけての料田形成期を考察の主体においたため、鎌倉後期以降の料田のあり方にはほとんど触れることができなかった。鎌倉後期は東大寺の寺内組織、荘園支配が大きく転換する時期であり、その中で料田経営のあり方がいかに変化するのかという点も今後の課題として挙げられよう。

註

- (1) 大仏燈油料田についての主な先行研究としては、泉谷康夫氏「東大寺大仏御油料田の成立と発展」(『奈良学芸大学紀要』人文・社会科学一四 一九六六)、熱田公氏「東大寺大仏殿常灯料田畠をめぐる」(『小葉田淳退官記念 国史論集』小葉田淳教授退官記念事業会 一九七〇)、永村真氏「東大寺大勧進職と油倉の成立」(『民衆史研究』一二 一九七四)・「東大寺油倉の成立とその経済諸活動」(『中世東大寺の組織と経営』塙書房 一九八九)、稲葉伸道氏「中世東大寺寺院構造序説」(『年報中世史研究』創刊号 一九七六、のち『中世寺院の権力構造』(岩波書店 一九九七)に所収)安田次郎氏「百姓名と土地所有」(『史学雑誌』九〇―四 一九八一、のち『展望日本歴史』8 荘園公領制」(東京堂出版 二〇〇〇)に所収)が挙げられる。また、その他にも、世親講料田を扱った、永村真氏「鎌倉期東大寺講衆集団の存立基盤」(『日本歴史』三六三 一九七八、のち、一部補訂して『中世東大寺の組織と経営』(塙書房 一九八九)に所収)、二月堂料田を扱った、横内裕人氏「東大寺二月堂修二会と黒田荘」(『南都仏教』七四・七五 一九九七)、伊賀国黒田荘における収取体制の変質過程と料田との関係を指摘した新井孝重氏「伊賀国黒田荘の構造とその変化」(竹内理三

編『荘園制社会と身分構造』校倉書房 一九八〇、のち「悪党発生の基礎構造」と改題して、『中世悪党の研究』(吉川弘文館 一九九〇)に所収。『燈油聖の土地集積』(『東大寺領伊賀国黒田荘の研究』校倉書房 二〇〇一)なども重要な先行研究と言える。

- (2) 東大寺大仏殿堂童子申状案(狩野亨吉氏所蔵文書一八『鎌倉遺文』補三・一三二)
- (3) 松田福一郎氏所蔵文書『鎌倉遺文』補三・一三二〇
- (4) 寿永二年(一一八三)十一月八日 僧永善田地相博状(三宅長策氏所蔵文書、『伊賀国黒田荘史料』二 三九二)
- (5) 貞永元年(一二三二)七月 日 僧理詮田地売券(三宅長策氏所蔵文書、『鎌倉遺文』六・四三五四)
- (6) 寛元元年(一二四三)四月十八日 僧阿念田地寄進状(前半Ⅱ東大寺文書三―二―一〇、後半Ⅱ東大寺文書成卷八四卷『大日本古文書 家わけ十八 東大寺文書』九 七七〇号文書〔以下『大日』九・七七〇のように略記する〕『鎌倉遺文』九・六二六九)
- (7) 寛元元年(一二四三)閏七月二日 東大寺年預所下知状(東京大学所蔵東大寺文書、『大日』別集一・五一)
- (8) 寛元元年(一二四三)閏七月二日 伊賀国黒田荘預所下文(市島謙吉氏所蔵文書、『鎌倉遺文』九・六二二四)
- (9) 京都大学所蔵古文書集、『鎌倉遺文』九・六二二六。当文書は『鎌倉遺文』では文書名を「伊賀黒田荘三職下文」としているが、相論地における堂童子の進退を、「更以不可有違乱」として、「為後日沙汰」署判を加えるという内容から、むしろ年預所・預所の下文を請けて提出した請文であると思われる。よって、文書名は「伊賀黒田荘三職請文」とすべきであろう。
- (10) 寛元元年(一二四三)十月 日 東大寺大仏殿堂童子請取状(狩野亨吉氏蒐集文書一八、『鎌倉遺文』補三・一三二五)
- (11) 前掲註1、「悪党発生の基礎構造」
- (12) 前掲註8参照

(13) 堂童子の公人としての活動については、稲葉伸道氏「中世公人に關する一考察—寺院の公人を中心として」(『史学雑誌』八九—一〇 一九八〇、のち「中世公人—寺院の公人を中心として」と改題して『中世寺院の権力構造』(岩波書店 一九九七)所収)を参照されたい。

(14) 前掲註10参照

(15) 谷森善臣氏所藏大仏燈油料田記録、『鎌倉遺文』二四・一八五—一七 僧宗円田地寄進状(三國地誌一一〇、『鎌倉遺文』一二・九〇—二三)この寄進状は一部文意の通らない部分があるが、他の事例から推測して、同様の事例として差し支えないであろう。

(16) 東大寺文書一—一九五、『大目』一〇・五三。なお、当史料は土代のため書き換えが多いので、文意を分かりやすくするため、適宜見やすく改めた。

(17) このような年領所の性質は鎌倉中期までに限定すれば料田に限らず、荘園年貢の場合でも概ね同様なのではないか。建仁二年(一一二一)四月日僧覺仁後家尼真妙陳状案(『大目』五・四五)、建仁二年(一一二一)三綱等申状案(同四六)建長五年九月二十三日 僧源雲起請文(東大寺文書三—三—三〇二、『鎌倉遺文』一〇・七六一九)では、それぞれ華嚴会饗料・学生供米の「未進」により公人を派遣している。

(18) 寛元元年三月二十六日 黒田莊預所範慶下文(東大寺文書一—一八二『大目』一〇・五六)、寛元元年十月十九日 黒田莊預所範慶下文(東大寺文書一—一八六『大目』一〇・五八)などが挙げられる。

(19) 醍醐寺本東大寺要録卷第二、『鎌倉遺文』三五・二七五—七。

(20) 平安期の白米免田のあり方については、差し当たって稲垣泰彦氏『日本中世社会史論』(東京大学出版会 一九八二)、佐藤泰弘氏「東大寺領大和国小東莊」(『日本中世の黎明』(京都大学学術出版会 二〇〇一)所収)などを参照されたい。

(21) 東大寺統要録寺領章『鎌倉遺文』四・二—一〇七

(22) 長治元年(一一〇四)五月二十九日 東大寺司料米切符(筒井寛聖氏所

藏東大寺文書、『平安遺文』四・一五四〇)、東大寺堂司遲因申文案(東大寺文書四—二八、『平安遺文』七・三二—九二)

(23) 前掲註21 東大寺堂司遲因申文案

(24) 天喜六年(一一〇五八)九月一日 東大寺大仏殿司桓運解(東大寺文書一—二五—三〇五『平安遺文』三・八九五)

(25) 『三國地誌』卷一一〇、『鎌倉遺文』一〇・七〇五六

(26) 天福二年九月二十二日 僧円定田地寄進状(東大寺成卷文書九一卷、『大目』九・八四九)

(27) 例えば、永村氏は世親講料田における集積活動を惣寺財政の傾斜に求めることはできない、としている。これは、仏聖料田の事例から導き出した本稿の結論と異なる。このようなあり方をいかに理解すべきかが、今後の課題の一つとなろう。